

特別寄稿

小林忠生
昭和5年生
湘南、慶応
全日本選手権で慶応
B.R.B.で出場、26、
27、29、31年優勝。28
年ユニバーシアード
(ドルトムント)出場
31年メルボルンオリ
ンピック出場。

現在三田サッカークラブ

定期戦ことはじめ

(湘南) 小林忠生

22年の初夏、白い夏の制服がやけに印象に残っている当時紅顔の美少年達、鈴木(トクエ)、原(ゲーグー)、山形(オトキチ)の3君がはるばる藤沢の湘南中学まで定期戦の申し入れに来て呉れた。他の種目は学習院と定期戦を組んでいるが、「サッカーは是非湘南と」とのことであり我々としても有難くお受けした。

戦後間もなくのことであり、まだまだ昔からの名門チーム(サッカーだけでなく今で云う進学校でもあった)が強く、例えば附属、五中(小石川高)、九中(北園高)、湘南、浦和中(県立浦和高)などが強豪と目されていた。附属はその前年に行われた全国中学選手権で関西の雄、神戸一中を決勝戦で1対0で破り優勝しており、願ってもない定期戦の申し入れであった。

第一回の定期戦は2対1で湘南が勝たせて貰ったが大変な熱戦であったことを記憶している。当時の附属のメンバーのうち慶応に進んだ鈴木、松沢、両角君達とは勿論のことながら藤本君とは会社(東京海上)のチームで、村岡君とはユニバーシアード(ドルトムント)代表チームで夫々チームメートとして一緒に楽しくプレイをさせて貰ったことが懐しく思い出されます。

湘南と附属とは勉学を重視すると云った学校の校風や環境が似ていると思われるし、そのサッカーもショートパスを中心としてチームプレイを重視するカラーのチームであり、まさに恰好の好敵手と思われる。

今後両チームが文武兼ね備えた高校生らしい選手達によって好試合が続けられることを望んで止みません。

東京高師附属中学のサッカー部は、昭和二十三年四月から新しい学制によって、附属中学と附属高校の二つの部にわかれた。

われわれ五十八回生は中学四年生として神宮競技場での中等模範試合や、第一回対湘南定期戦に出場したあと、新制高校の二年生として、新しいサッカー部の生活を始め、第二回対湘南戦など、附属高校が引継いだ。

その後、教育大附属から筑波大附属へと変遷していくが、東京高師附属中学の輝かしい伝統を、新制高校で受けつぎ、東京選手権大会で優勝という、華々しいスタートを切ることができたのはうれしかった。このうら先輩たちの私生活を犠牲にした熱心な指導や、経済的援助があったのを忘れることはできない。

旧制中学の最後の年は、天皇陛下が初めてサッカーの試合を見にお出かけになるという神宮競技場の晴れの舞台で、九中と模範試合をしたのと、対湘南定期戦を始めた、二つのイベントで飾られている。

物資不足の時代で、ユニホームといっても各自それぞれの白いシャツの胸に図案化した桐のマークをぬいつけるだけだったのが、天覧試合の時には、先輩たちの援助で初めて白の揃いのYシャツ型のユニホームが渡され、晴れがましい気分ひたされた。

試合は1対0で負けたが、LBだった鬼沢文彦は「ゴールポストぎりぎりのところを、相手のLIがトウでつついたようなボールがコロコロと入った。GK村岡は自分のうしろにいた。ブラインドになったのだろう」と、いまま鮮明な記憶を語り、くやしさを思い起こさせる。

対湘南定期戦は、試合の機会をできるだけ多くしてやろうという先輩たちの配慮で、当時コーチに来てくれていた西川純一(47回)加藤美定(49回)両氏が交渉にあたってくれた。学習院にはサッカー部がなく、湘南は関東の名門校として有名だったうえ、選手たちには「前年関東大会で負けたくやしさをはらしたかった」(鈴木徳衛・57回)という気持ちもあったようだ。

西川・加藤両先輩の熱心な指導ぶりは、いま思い出しても頭がさがる。二氏の住居は都立大学前のわりあい近いところがあったが、三日に一回ぐらいはゆききし、試合前には十一時すぎまで話しあい作戦をたてたという。西川氏は仕事が終ると会社から高田馬場まで走って三分、目白からバスで音羽通りからはまた坂を駆けあがって練習にかけつけてくれた。学制は変わっても、附属の伝統はこうした先輩たちの努力で引き継がれていったのである。

発行
東京高師範学校附属中学
サッカー部60周年誌編集委員会
委員 春山泰隆
『附属中学サッカー部』
1984年5月19日発行

湘南戦は一、二回とも負けたが、応援は院戦、成レースなみに全校あげてといった盛大なもので全国大会を目指す予選トーナメントとは違った感じがともなったものだった。この頃はもう応援もなくなったと聞き残念な気がする。